●四国

岸 啓子

四国唯一のプロオーケストラである瀬戸フィル（高松市）は，大友直人を音楽アドバイザーに迎え，氏の指揮のもと第40回定演ではレスピーギのローマ３部作を約100人の大編成で演奏し，色彩と躍動感の表現に新境地を拓き，第41回定演ではラフマニノフ・プロ（pf青柳晋）を好演して存在感を高めた。また，愛媛と高知でのコンサート（指揮：三ツ橋敬子　vc宮田大　pf宮﨑朋菜），創作オペラ初演，瀬戸内海国立公園90周年記念SETOUCHIコンサート（指揮：松岡究 pf宮﨑朋菜），しこちゅ～第九演奏会（指揮：小森康弘　四国中央市）等に出演し，併せて地域密着型の福祉音楽会，ゼロ歳からのコンサート，街クラシックin高松，イオンでの連続演奏等を通して地元の音楽文化を盛り上げた。

Withコロナの試行期を乗り越えた24年は，声楽と管楽器を選曲や企画の段階から重視する傾向がみられたが，ベートーヴェン第９交響曲日本初演の地・鳴門やその源流の丸亀では，初演200年を節目に地元の祭りのような盛り上がりを見せ，恒例の鳴門第９演奏会（指揮：山田啓明　徳島交響楽団　5月）は県外や海外勢を迎えて圧巻の大合唱となり，丸亀第９演奏会（指揮：松下京介　丸亀シティフィル）と本願寺塩屋別院でのプレコンサート，「かがわ第９演奏会」（高松市）も盛況だった。四万十川国際音楽祭も夏に第９演奏会を開催した（指揮：柳川雅史　中村交響楽団　8月）。

高松交響楽団はロマン派プログラムを好演（第130回　指揮：山上紘生　pf青島周平，第131回　指揮：田中一嘉），更に，2024～わたしの街のソリスト達～，アフィニス夏の音楽祭等にも出演し，あいうえ音楽教室やジュニアオケの育成にも尽力した。高松では2020年から続く「ベートーヴェン記念祭」連続演奏が佳境を迎え，初演時のプログラム・試演時の極小編成による交響曲第５，第６番他の長尺演奏会が注目された（指揮：大山晃）。

四国フィルは高知文化賞受賞記念音楽会（指揮：澤和樹）を開催，高知交響楽団は二度の定演でスメタナの第８，第９番交響曲を連続演奏した（第172回　指揮：鈴木恵理奈　第８番は高響初，第173回　指揮：萩原勇）。高響～のいち駅夕涼みコンサートも順調である。愛媛交響楽団もロマン派の意欲的プログラムを組み，特に初挑戦のブルックナー第４番は期待を超える名演を聴かせた（第51回　指揮：上野正博，第52回　指揮：森口真司　vcN.ローゼン）。徳島交響楽団も健在である（指揮：関谷弘志　sop楠野麻衣　1月，第53回定期　指揮：喜古恵理香　vn成田達輝）。

香川では新作オペラ『扇の的～青葉の笛編～』（作曲：田中久美子　台本：山本恵三）初演があった。一の谷の合戦で非業の死を遂げた若武者平敦盛の生きざまと妻葵との夫婦愛を描いた本編は，第１作『扇の的～ここからはじまる～』の前編にあたり，今回もオール香川のキャストが組まれた（芸術監督：若井健司　音楽監督：大山晃　指揮：守山俊吾　演出：中村敬一　葵：林 里美　佐治名津子，平 敦盛：國方里佳　越智慎悟他　瀬戸フィル　10月）。音楽はメロディアスで映像とともに聴衆を魅了し，前作同様今後更に評価を高めていくと期待されている。

徳島では，オペラ徳島とさわかみオペラがそれぞれドニゼッティの『愛の妙薬』を上演した（オペラ徳島　指揮：中井章徳　アディーナ：乗松恵美　ネモリーノ：藤田卓也他）。オペラえひめは「ヴェルディ～オペラの世界～」（第15回　演奏会形式）とサロンコンサートを，四国二期会は40周年記念公演を高知と愛媛で開催した。

コレギウム・ムジクム高松はバッハの復元カンタータBWV197.1（197a）へのチャレンジを楽しみ（第28回　主宰・指揮：大山晃），安定の実力を誇る高知バッハカンタータフェラインはバッハとブラームスの宗教曲を演奏した（第27回　主宰・バス・指揮：小原浄二）。第７回高松国際古楽祭（芸術監督：柴田俊幸）はガラコンサートを中心に多彩な催しを展開し，松山では古楽アンサンブルによる「太陽王の残光」（cemb曾根田俊 gamba平尾雅子他）が注目を集めた。

岸 啓子（きし・けいこ）
東京芸術大学音楽学部大学院音楽研究科（音楽学）修士課程修了
愛媛大学教育学部音楽科に教員として40年勤務
愛媛大学名誉教授
著書　はじめての音楽史（音楽之友社　分担執筆）他